

## ルカによる福音書 23 章 1-25 節 「十字架に付ける声」

### 1A ヘロデとの仲 1-12

1B 政治的好機 1-7

2B 悔い改めなき好奇心 8-12

### 2A ピラトの判定 13-25

1B 不正な宥め 13-16

2B 大声の勝利 17-25

## 本文

ルカによる福音書 23 章です。23 章はとても内容が詰まっていますので、前半と後半に分けて学びたいと思います。今日は 25 節まで読んでいきます。前回私たちは、ユダヤ人の宗教指導者たちはイエスを殺そうとしていたけれども、人々の手前それをするのができなかったことを読みました。ところが、仲間が裏切りました。イスカリオテのユダです。彼の裏切りがなければ、イエス様を彼らは捕えることができませんでした。暗闇の力が支配していきました。主にある弟子たちの交わりにも、亀裂が走り、彼らはイエス様を見捨て、ペテロは三度、イエス様を知らないと言いました。

そして私たちは 23 章において、さらなる人間の闇の部分を読みます。ユダヤ人の宗教指導者のイエスを殺す意図は、彼を殺す権威を持っている人が「殺さない」と言えば、殺すことはできなかったのです。けれども、無罪だと分かっていたのにそれでも十字架刑に処した。そこに渦巻く、人々の闇の部分を取り扱います。

### 1A ヘロデとの仲 1-12

1B 政治的好機 1-7

23:1 そこで、彼らは全員が立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。

私たちは 22 章の最後で、イエス様がユダヤ人たちによって死刑の宣告を受けた後の出来事を読みました。夜中に大祭司カヤパの家でイエスが死刑だとしたのですが、正式な議会、サンヘドリンは日中に行わなければならないため、夜が明けてから行いました(22 章 66 節)。イエス様を死刑に定め、本来ならユダヤ人は石投げによって殺すことを律法によって定められていましたから、それをすればよかったのですが、当時、ローマからユダヤ人は死刑の権利を剥奪されていました。

そこでローマ総督ピラトのところまでイエス様を連れてきたのです。ピラトは、ローマのユダヤ属州を、紀元後 26 年から 36 年まで治めていた総督でした。本来は、この地域はヘロデ家の統治下にありました。ヘロデ大王は、イドマヤ人であり、エドム人の末裔でありましたが、イドマヤ人がかつて強制的にユダヤ教に改宗させられており、改宗したユダヤ教徒でした。ヘロデは、ローマの

軍事行動を積極的に援助することにより、ローマ皇帝の信用を勝ち得て、それで、ローマから「ユダヤ人の王」という称号を受け取りました。彼は紀元前 4 年に死んで、息子四人に領土が分割されて分割統治をしました。

ところが、ユダヤ地方を息子の一人ヘロデ・アルケラスが支配していましたが、度重なる失政でローマ皇帝によって紀元 6 年に解任させられました。そこで、ローマはサマリアとユダヤ、さらにその南のイドマヤの地方を「ユダヤ属州」として、直轄で支配しました。そしてその州都はカイザリヤでした。ユダヤ教の改宗者であり、エルサレムに神殿を建てたヘロデ大王をしても、純粹に神を礼拝しようとするユダヤ人からは好意を勝ち得ることはできませんでしたが、皇帝崇拜を中心にする異教文化を持ち合わせるローマが直接支配となると、ユダヤ人との軋轢と摩擦はかなりひどくなっていきました。ユダヤ人熱心党による抵抗運動が度々、起こっていました。

その中で、ポンテオ・ピラトは、ユダヤ人に対しては冷血な支配者でした。ユダヤ人の宗教的な心情に対して、全く無視し、冷血な処置を取っていました。皇帝の像をエルサレムに持ち込んでローマ軍を行進させることで、ユダヤ人の反感を買ったので、彼は群衆に兵士を紛れ込ませて、騒ぎ立てる者たちを見つけ出し、殺させようしました。ところがユダヤ人は、「律法に背くよりは、剣で殺されたほうがましである。」として首を差し出したので、これでは騒動が発展して反乱になるかもしれないと案じて、ようやく皇帝の像を外したという話もあります。また、神殿の金庫から財産を没収して導水橋の建設にあてがって、ユダヤ人たちが怒り狂ったのですが、それで鎮圧するためにローマ兵に大衆と同じ格好をさせて、棍棒で騒動を起こしている者たちを打ち殺していったという話もあります。ルカ 13 章には、「ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜたというのである。(1 節)」とあり、その冷血さを垣間見ます。

こういうピラトでさえ、抑えつけることのできないほどの騒動や反乱に発展したら、ローマに報告されるので、その中で自分の地位を確保するのに苦心していたと言えるでしょう。そんなピラトのところに、祭司長たちと律法学者たちがやって来て、訴えたのです。

23:2 そしてイエスについて訴え始めた。彼らは言った。「この人はわが国民を惑わし、カイザルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることがわかりました。」

ユダヤ人指導者たちは、自分たちがイエスを死刑にするという根拠は、この方が神の子キリストであると自ら証言したからだ、ということで死刑判決を下しましたが、ピラトがそのような宗教上の根拠を全く聞くはずもない、むしろ蔑むであろうことは分かっていました。それで、ローマの法律に抵触する告訴をしなければいけませんでした。一つは国民を惑わす罪です。民衆を扇動し、暴動を起こす罪です。もう一つは、納税拒否を指導した罪です。さらに、皇帝反逆罪です。カイザルのみが王であるのに、自分を王としている罪です。

23:3 するとピラトはイエスに、「あなたは、ユダヤ人の王ですか。」と尋ねた。イエスは答えて、「そのとおりです。」と言われた。

ピラトは、話を聞いていると、初めの二つには全く根拠がないことは明らかでした。ただし、「自分は王キリスト」という訴えだけが気になりました。けれども、それでも、彼の目の前にいるのは、激しく殴られ顔にあざができて、変形もしているかもしれない、みずぼらしいユダヤ人の男でした。それで、「おまえが、ユダヤ人の王なのか。」とかなり皮肉を込めて尋ねたのだと思います。ここで、イエス様が王たるにふさわしい、何らかの奇蹟や不思議を見せたならば気を引けたかもしれませえんが、イエス様はそんなことはなさいませんでした。ただ大祭司の前で答えたのと同じように、「そのとおりです」と答えておられます。

23:4 ピラトは祭司長たちや群衆に、「この人には何の罪も見つからない。」と言った。23:5 しかし彼らはあくまで言い張って、「この人は、ガリラヤからここまで、ユダヤ全土で教えながら、この民を扇動しているのです。」と言った。

ピラトは、何度となく「この人には罪は見つからない。」と宣言しています。裁判官として、彼は無罪を宣言し、イエスを釈放する権限は当然持っていたし、ユダヤ人に対してそれだけ冷酷なことをしていた彼は、通常ならば全く悩むことなく釈放していたことでしょう。しかし、「彼らはあくまで言い張って」というところに、これまでとは違い並々ならぬ力を感じたのだらうと思われれます。それは突き詰めれば、イエス様を憎むところの闇の力であり、しかしその闇の力さえもご自分の永遠の救いの計画の中に入れておられた、神の主権の力でもありました。

イエス様に対面するということは、真理そのもの、光そのものに対面することです。他の人に対面するようには決してさせない、神の力がそこにはあります。どんなに無関心であり、神の事柄から遠く離れているようなピラトをしても、自分の心が探られ、その良心に挑戦を受けるようにされたのです。私たちがここまで、イエス様を人々にご紹介する時に相手に対して、そのイエス様を伝えられているかどうか考える必要があります。

23:6 それを聞いたピラトは、この人はガリラヤ人かと尋ねて、23:7 ヘロデの支配下にあるとわかると、イエスをヘロデのところへ送った。ヘロデもそのころエルサレムにいたからである。

ピラトが、イエスという方について「何の罪もない」という判断に対して、決断をしないいうところに、ピラトの罪があります。彼はイエス様に対面して、それでも無罪だという判決を出し、そのように釈放するところに、彼自身がイエス様の側に付くという決断をしなければいけない、そういう流れがありました。ガリラヤ人であるということは、そこはヘロデ・アンティパスの支配下であるので、ちょうど良いと思いました。いわば、彼に顔を立てることができる、ということです。彼は、イエス様に対する判決を自分の政治的好機として捉えたのです。

ローマ総督は、ユダヤ人の三大祭りの時、すなわち過越の祭り、五旬節、そして仮庵の祭りの時には、エルサレムに行きます。その時にユダヤ人たちが祭りの中で、民族的意識が高揚するからです。特に神殿の敷地で騒動が起こらないように、それに隣接するアントニオ要塞で上から見下ろす形で監視していました。それでピラトはエルサレムにいますが、ヘロデはユダヤ教の改宗者ですから、エルサレムにいます。ヘロデにはヘロデ宮殿があり、イエス様をアントニオ要塞からヘロデ宮殿に連れて行ったのです。

## 2B 悔い改めなき好奇心 8-12

そしてこのヘロデ・アンティパスであります。先ほど話した大王の死後、息子四人に領土を四分割したうち、ガリラヤとヨルダン側東にあるペレヤを統治する、「四分封領主」の一人となりました。新改訳では「国主」という呼び名で訳されています(ルカ 7:9)。そして、ガリラヤ湖にローマ皇帝にちなんで「ティベリヤ」の町を造り、そこに住んでいましたが、ユダヤ人は、そこはもともと墓地であったからということで、汚れた土地としてそこに住みませんでした。

ヨルダンへの旅行で訪問するペトラを首都とする、ナバテヤ王国というものがありましたが、その王でアレタス四世がいました。その娘が、ヘロデ・アンティパスの妻でした。ところが、ヘロデは自分の兄弟、ヘロデ・ピリポの妻であるヘロデヤを自分の妻にするという悪を行ないました。バプテスマのヨハネが、「あなたが兄弟の妻を自分のものとしていることは不法です。」と言い張ったため、彼をヘロデ大王が作った要塞マカエラスに幽閉しました。(死海のヨルダン側のほうにあります。)そしてヘロデヤはヨハネを恨み、殺したいと思っていましたが、ヘロデヤの娘が宴会の時に踊り、「ほしいものを与えよう。」と約束したので、娘は母に言いつけられて、「ヨハネの首」と言いました。それでヨハネを斬首しました。そして、イエス様がガリラヤ地方で宣教活動を行われていると、その話がヘロデの耳にも入り、ヨハネがよみがえったのではないかという噂が流れるほどの、このイエスは何者か、とイエスに会ってみようと思っていた、とルカ 9 章 9 節に書いてあります。

しかし、彼のその興味は、ちょうどバプテスマのヨハネに対して向けられたのと同じように、興味はあるのですが、自分の悪事が暴かれると当惑する、また脅威を抱くというものでした。イエス様がガリラヤ湖畔で人々の人気が集まった時に、ヘロデがあなたを殺そうとしているとパリサイ人がイエス様に伝えたことがあります。それに対してイエス様は、「行って、あの狐にこう言いなさい。(ルカ 13:32)」と言われました。ヘロデ・アンティパスの狡猾な態度をイエス様は嫌っていたことがここから伺えます。そうした背景があって、次の話があります。

23:8 ヘロデはイエスを見ると非常に喜んだ。ずっと前からイエスのことを聞いていたので、イエスに会いたいと思っていたし、イエスの行なう何かの奇蹟を見たいと考えていたからである。23:9 それで、いろいろと質問したが、イエスは彼に何もお答えにならなかった。23:10 祭司長たちと律法学者たちは立って、イエスを激しく訴えていた。23:11 ヘロデは、自分の兵士たちといっしょにイエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はでな衣を着せて、ピラトに送り返した。

ヘロデは、イエスには強い興味がありました。その行なう大きな奇蹟、その力に彼は非常な関心を示していました。しかし、その興味に対してのイエス様の反応は、「何も答えない」であります。まるで魔法使いか手品であるかのように、奇蹟の力を示すということは、イエス様は一切なされないからです。主は奇蹟を行なわれる方です。しかし、それは主がペテロに対して行なわれたように、「私は罪深いものです、私から離れてください。」という、罪の自覚、イエスが神から来た聖なる方であることを知り、主を畏れかしこんで、この方の前でへりくだって、ひれ伏すためであります。

そして、主がお答えにならなかったのは、イザヤ書 53 章の預言を成就させるためでもあります。「イザヤ 53:7 彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」

そしてここでも、祭司長と律法学者はイエス様を激しく訴えています。恐らくは、ユダヤ人の律法の細かいところも使って、訴えていたことでしょう。そして、自分の欲望、つまり奇蹟を見て、手品を見るように楽しみたいと思っていたところ、それに応じなかったので、一気に興ざめして、イエス様を嘲弄し、侮辱したりしました。そして、「はでな衣を着せて」いるとありますが、イエスがユダヤ人の王キリストであるということに、たっぷりと皮肉を込めて、風刺して着せたのだと思います。そしてルカによる福音書にしか書かれていない、大事な一節が次にあります。

23:12 この日、ヘロデとピラトは仲よくなった。それまでは互いに敵対していたのである。

互いに敵対していたところに、共通の敵がいるため仲良くなっています。どのような政治状況であったのか正確には分かりませんが、ピラトはローマによってユダヤ人の統治を任されているヘロデを立てることができ、すでにそこにあった政治的緊張状態が溶けたものと思われる。(注解書を読んだのですが、とても複雑な背景でした。)

実は、イエスを敵にすることで一つになった敵同士の者たちは、すでに出て来ています。10 節、祭司長と律法学者たちです。祭司長たちはサドカイ派で、律法学者たちはパリサイ派でありました。神殿の敷地において、サドカイ派の者たちがイエス様に、七人の夫の持っていた妻が復活の時にどうなるのか、と尋ねて死者の復活についての疑問を呈したところに、律法学者との違いが現われています。サドカイ派は、モーセ五書以外のものは信ぜず、御使いとか死者の復活のようなものは信じない、合理主義者、物質主義者でした。そして神殿礼拝を中心にする、祭司級の裕福な人々です。ローマとの関係を重視して、妥協をしても、自分たちの経済的、社会的地位を保証してくれる神殿制度を守ろうとした人々です。パリサイ派は、厳格な律法主義であり、先祖たちの教えを大切に、積み重ねによる伝統的聖書解釈を重んずる立場でした。非政治的団体でしたが、サドカイ派以上の民衆的基盤を持っていました。<sup>1</sup>ですから、サドカイ派とパリサイ派に確執が

<sup>1</sup> <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E6%B2%BB%E3%82%81%E3%82%8B%E8%80%85%E3%81%9F%E3%81%A1%E3>

あったのですが、イエスへの告白を通して仲良くなっているのです。

しばしば「敵の敵は味方」ということが言われます。しかし、これは人間の本質として、根源として、イエス様ご自身に対して、またイエス様が働かれているところに対して人々は、敵対することによって一つになっていきます。私たちは、このことに対してとても注意しなければいけません。本来は、自分自身が神の前に出て、神から聞いて解決しなければいけないのに、あることを神の前に持っていくことをせず、それを避けるために、真実を伝える人などを槍玉に挙げて、それで仲間意識を持っていきます。その一致は、イエス様に敵対するための一致なのです。

使徒の働きでは、詩篇第二篇がこの出来事を指しているものとして祈っています。「使徒 4:25-28 あなたは、聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの先祖であるダビデの口を通して、こう言われました。『なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ。』事実、ヘロデとポンテオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなたが油を注がれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、あなたの御手とみこころによって、あらかじめお定めになったことを行ないました。」詩篇二篇は、再臨のキリストへの預言につながっていますが、初臨におけるヘロデとピラトのイエスに対する反抗をも預言していました。

ですから、イエス様に対面する者たちが、興味のあった者も無関心な者も、共にその心が炙り出される、そういった闇の部分明らかにされる時でありました。それと同時に、これが神のご計画の中にあり、神が定められたことであることを知ることは大切です。主は、このような闇の中にも確実におられて、共におられることを知ることは大切です。

## **2A ピラトの判定 13-25**

### **1B 不正な宥め 13-16**

23:13 ピラトは祭司長たちと指導者たちと民衆とを呼び集め、23:14 こう言った。「あなたがたは、この人を、民衆を惑わす者として、私のところに連れて来たけれども、私があなたがたの前で取り調べたところ、あなたがたが訴えているような罪は別に何も見つかりません。23:15 ヘロデとても同じです。彼は私たちにこの人を送り返しました。見なさい。この人は、死罪に当たることは、何一つしていません。23:16 だから私は、懲らしめたうえで、釈放します。」

ピラトは、民衆の扇動者という告発を彼らはしていたけれども、イエスにはそのような罪はないと判決を下しました。さらに、ヘロデも嘲弄はしこそすれ、彼がイエスに罪を見出したという報告はありませんでした。それを利用して、ヘロデも罪を見付けることはできなかつたと後付けしています。これは公の宣言であり、「見なさい。」という言葉にそれが現われています。これで最終判決です。

---

%81%AF%E7%B5%90%E8%A8%97%E3%81%97%E3%81%A6%E6%B2%B9%E6%B3%A8%E3%81%8C%E3%82%8C%E3%81%9F%E8%80%85%E3%81%AB%E9%80%86%E3%82%89%E3%81%86

ところが、問題はここです、「だから私は、懲らしめたうえで、釈放します。」イエスに対して無罪判決を下すということは、他の普通の人が無罪判決を下すということと異なっていました。そこには、真実の光であられるイエス様に無罪判決を下すことであり、その光のところに来ようとしない、闇を愛する者たちにとっては耐え難いことなのです。そして、ピラト自身がイエスを信じるか、拒むかの選択が迫られているのです。もし、ピラトが無罪判決のままにするならば、ユダヤ人指導者や民衆が許さない、それでもやはり無罪判決にするのか？ たった、いつも普通にしていることがここではできないようにさせており、それはイエス様がかつて、「11:23 わたしの味方でない者はわたしに逆らう者であり、わたしとともに集めない者は散らす者です。」と言われたように、イエスの側に付かない限り、その判決を保持することができません。

したがってピラトは、それができなかったことを示しているのです。他の違う妥協案で、イエスを鞭打ちにすることによってユダヤ人を宥めようとしたのです。けれども、その時点で彼はイエスの味方ではなく、イエスに逆らう者になっています。これが、私たち全ての人イエス様に対面することなのです。自分はイエスに逆らっているなど考えていない、中庸だと考えています。けれども、真実な姿に出会う時に、必ず味方なのか、敵なのか、つまりイエスを主として自分の心に受け入れ、この方に自分の身を明け渡すのか、それとも引き下がつて、この方を敵に回すのかのどちらかになります。

## 2B 大声の勝利 17-25

17 節は引照、ページ下にあります。23:17 「さて、ピラトは祭りのときにひとりを彼らのために釈放してやらなければならなかった。23:18 しかし彼らは、声をそろえて叫んだ。「この人を除け。バラバを釈放しろ。」23:19 バラバとは、都に起こった暴動と人殺しのかどで、牢にはいついた者である。

ピラトは、まさに祭司長や指導者たちが告発していた扇動者の罪を犯して収容されている男を連れて来ました。ここまで明らかな対比はありません。何もそのような罪に値することはしていないイエスと、まさにそのようなことをしているバラバであります。今で言うと、まさにテロリストです。

23:20 ピラトは、イエスを釈放しようと思って、彼らに、もう一度呼びかけた。23:21 しかし、彼らは叫び続けて、「十字架だ。十字架につける。」と言った。23:22 しかしピラトは三度目に彼らにこう言った。「あの方がどんな悪いことをしたというのか。あの人には、死に当たる罪は、何も見つかりません。だから私は、懲らしめたうえで、釈放します。」23:23 ところが、彼らはあくまで主張し続け、十字架につけるよう大声で要求した。そしてついにその声が勝った。

恐ろしいことの瞬間が来ました。無罪である者、しかも神の御子ご本人を殺すという声が勝った、という瞬間です。ピラトは三度、無罪の宣告をしました。しかし、権威に聞き従いませんでした。ここで使われている言葉は、まるで、だだをこねている子供たちのそれです。18 節の「声をそろえて叫

んだ」というのは、絶叫する、わめき散らすという意味です。21 節の「叫び続けた」は、同じく「わめき立てる」を意味します。そして23 節の「大声で要求した」の大声は、大きな数々の声です。大声を上げれば主張が通るというのには、あるいは大声で喚いているのは、そこに根拠も何もないからです。

人間は、真実から来る良心の声に対して、このようにわめき立てます？本来なら行なうべきことについて、それを行なわせないように、必死に抵抗し、聞きたくないと呼びます。そして、自分の願いを要求として突きつけて、それを正義を覆してでも通そうとします。

23:24 ピラトは、彼らの要求どおりにすることを宣告した。23:25 すなわち、暴動と人殺しのかどで牢にはいていた男を願いどおりに釈放し、イエスを彼らに引き渡して好きなようにさせた。

ルカは、敢えてこの判決の不条理を浮き彫りにしています。バラバが、暴動と人殺しのかどで牢に入っていた男を願いどおりに釈放しました。善なる方を罪人とし、悪人を無罪にしました。しかし、この不条理そのものが、神のご計画の中で許されました。人間の闇がもっとも明らかにされたのが、イエス様の十字架の判決ですが、神の深いご計画が明らかにされたのも、イエス様の十字架です。

ここに私たちは希望を見出します。私たち人間は、悩んでいます。不条理、理不尽、不当なことが起こっている中で、何でこんなことが起こっているのかと悩みます。しかし神は、その悩みにお答えになりません。しかし、その時においてもイエス様は神に信頼しました。そしてその信頼のゆえに、死なれたけれども、三日目によみがえりました。そして、その闇の力の主である悪魔を打ち倒してくださったのです。人の闇を見る時に、そして何よりも自分自身の闇を見る時に、私たちはこれこそがイエス様の道であることを知って、主と共に歩むことを思い出しましょう。そして主と共にその復活の力によって生きていきましょう。